

ネパール大地震 2015 (5)

1. 5月2日の行程

福島医大伊関教授、矢野医師、土肥医学生、山本貞子看護師、ミナ(知人で我が家に宿泊しているベトナム人)と私、総勢6人で8時に家を出て、今回の地震で一番被害を受けた地方といわれるシンドバルチョークへ車で向かう。郡病院のあるチョウタラ地区、日本の救急援助隊が活動するバービセ地区、AMDAの活動地バレピ地区を見て回る。帰りは地すべり除去のため、渋滞にあい夜8時帰宅。

2. 知り得た情報

1) シンドバルチョーク郡病院

カトマンズから車で3時間。途中ドリケルを通りカブレ郡にはいったころから、ハイウェイの両側に立つ家の倒壊がところどころ出てきた、シンドバルチョークの郡庁チョウタラ地区は5割から7割ぐらいの家屋、鉄筋も含め家屋が倒壊し、2011年、東日本大震災の時、釜石などの被災地で見た光景に近い。

*郡病院は3階建ての鉄筋造り、外からは被害は少なうに見えたが、中はかなりの亀裂、損傷があり、中に人はおれないとのこと。近くのグラウンドにテントを張り、外来、入院患者を診ていた。

*来院患者、発生日から5月1日までで600人、一日ほぼ100人の外来。今までにシンドバルチョーク郡での死亡者2400人。

*病院職員、警察、地域の日赤関係者、それにトリブバン大学病院、KICAから応援の医療従事者がたくさん来ており、医療従事者は足りている様子。ここでも混乱はない。

2) バーラビセ地区

郡庁のあるチョウタラ地区から、カトマンズ方面に1時間戻り、アルニコ街道に出る。そこから中国国境に向けて走ること1時間、バーラビセ地区に到着。町はかなり小さいが、その周辺の被害が大きく、2日から日本の緊急医療援助隊がここに仮設診療所を開設している。隊員40人ばかり、隊長の日本医科歯科大学救急部、大友教授にお会いし話を伺う。福島医大の伊関教授とは学会などで旧知の仲。やっと現場に到着し、これから仕事開始とのこと。外国の医療援助隊もかなり入っている様子。そこでAMDAとして被災現場に派遣された前田さん(以前JICAネパールの職員)と長崎大学熱帯医学研究所の山本先生に会う。

2) バレピ地区、AMDA

バーラセビから20分ほど街道をもどり、バレピでJIRIへ行く方向に曲がり、スニコシ川にかかる橋を渡った左側に病院があり、その中庭でAMDAが活動している。AMDAネパールは医師2人を含め10人ぐらい、それに日本人2名が加わり総勢12人。入院患者5、6人が天幕の下でベッドに横たわっている。午後とも会って外来は

いない。

3. 印象。

* シンドパルチョーク郡が今まで見たうちで一番ひどく家屋が倒壊している。

* 亡くなられた方も2400人、けがされた方も多いが医療は病院、診療所に関しては足りているというより、余っている感じ。ただ、歩いて何日の山奥の集落の様子が分からない。医療援助も重症患者の手当て、けが人の処置から慢性疾患の管理、予防、PTSDへの対処などフェイズが代わってきた。

* ここでも今一番必要とされているのは住宅に代わる、テント、ビニールシートや食料のようだ。

5月3日

1. 行程

朝7時カトマンズの家を出発。福島医大の伊関先生、矢野先生、山本看護師、ミナそれに私、途中で以前ラムジュン病院で働いていたヤムナと弟のサントスを載せて総勢7人。ヤムナはチョウジャリ出身で私たちのネパール保健医療育英会の元奨学生、現在看護の学士コースに通っているが、この震災で休みが続き、ボランティアでラムジュン病院で手伝うことになる。ラムジュンまでの道は損傷はないようだ。車も少なく、快調に飛ばし、ラムジュン着。昼食後、病院視察。事務長から被害の状況を聞く。

2時過ぎ、6人を置いてカトマンズに戻る。7時過ぎ無事家に到着。

2. 得られた情報

* 道中、地震の震源地近くを通ったが、街道筋からは目立った被害が見えず、普段と変わらず活気がある。ただ交通量はダサイン(ネパールの長期休暇、日本のお盆と正月を一緒にした休暇)の時よりも少ない。

* ラムジュン市内もいつもと変わらず、病院にも目立った損傷は見られず。

* 事務長から被害の状況を聞く。ラムジュン郡内での死亡者6人。今日まで病院に地震によるけがで外来を訪れた者34人。そのうち9人手術。今2チーム被災地に派遣しており、3日夜には戻る。報告を受ければ被害の状況がもう少し明らかになるか。

3. 印象

* シンドパルチョーク郡に比べて、ゴルカ郡、ラムジュン郡は震源地に最も近いところにも関わらず被害が少ない。(街道筋だけの印象だが)

* ラムジュン病院も医者を含め、医療人は足りている。

* 必要なのは食料、住宅に代わるもの、今後の見通し、希望、か。